



## 福島原発作業の体験談とSDGsの授業

9年生(中学3年生)向けのSDGsの授業に参加しました。ハインリヒ・ベレ財団の協力によるもので、ジャーナリストの桐島瞬さんが福島原発で作業員をしていた体験を披露。

午前中いっぱいかけて生徒150人はエネルギー問題について知識を深め、討論し、問題の解決策について考えました。ドイツではSDGsは学校はもちろん、企業もその重要性を掲げ、さまざまな取り組みをしています。

桐島瞬さんは福島原発事故の翌年、身分を隠して同原発の第一と第二で計9ヶ月、作業員として従事。炉心を冷却するホースをつないだり、汚染水を機械を通してきれいにするなど重労働を担っていました。

生徒から「どうして危険なのに、原発で働いたのですか」「チェルノブイリのように石棺にすればいいのにどうしてしないのですか」という質問が出て、関心の高さがうかがえました。



エネルギーについて話を聞く生徒たち

続けて財団関係者がドイツの電力の半分以上が再生可能エネルギーでまかなわれていることを説明し、将来のエネルギーや生活について「身近なことから考える」ことを促しました。

生徒たちは5～7人のグループになり、下記の順で話し合いながら案を出しました。

- ①何が気になっているか
- ② どういう状況を望むか
- ③どうやったら実現できるのか

その中で次のような案が出てきました。

学校にリンゴの木を植える／貧困、食べ物が十分でない／飲み水／気候保護を推進するポイント制度／学校生活にもっと緑を／心地よいじめなくす／食品ロスをなくす

大きなことでなく、自分に引きつけて考えるのがポイントで、解決策は一時的なものではなく

持続可能でなければなりません。他校の例では、電動キックボードで登校したいが、学校で充電できないとのこと。そこでプロジェクトを立ち上げ1年かけて充電設備の場所を決め、近所の職業学校と協力して設置したそうです。生徒たちが自分たちの案を実行したのだから、達成感もあり大事に使用しているとか。世界の問題と自分の問題はつながっていて、何かしらできることがあると感じました。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

### AKIRA の 成長記録

明は来夏、高校4年生で学校を卒業します(日本より1年長い)。卒業時の成績が大学入学資格(アビトゥア)の成績になり、その成績表を添えて希望大学に入学申請をします。入学試験はなく、何校にでも提出できます。卒業前2年間の成績が6割、そして卒業試験が4割でアビトゥアの成績が決まるので、明の学年から真面目に勉強する子が増えてきます。

明は先日試験あり、日本のような三択や穴埋めではなく、自分が考えて書くものばかりで、紙を持参して10ページ程度書きます。

成績にはテストだけでなく授業中の発言、すなわち授業に積極的に参加しているか否かも評価の対象とされます。内容の質はもちろん、スライドの作り方、説明の仕方など細かく採点されます。

採点が不当だと思うときは先生に抗議し、きちんとした理由があれば変更されます。明は足の手術のため体育の授業に参加できなかったため、先生の依頼で棒高跳びの理論をまとめたり、授業の用意や片付けをしたのでまあまあの成績(日本でいうと4)でした。

しかし明は「やれることは全部やるとし、手術のため授業を受けられないのは不可抗力だ」と話しに行き、先生は「よくやっているのはわかってたけど、授業を受けてない子に満点はつけるのは前例がない」といっていましたが、

結局満点をつけてくれました。理論的に話をして先生を納得させる。これも学校で鍛えるスキルのように、日本とはずいぶん違います

また18歳になると成人なので、学校を休むのに親の許可がいらず、なんでも自分で決められ、先生も本人の意志を尊重するようになります。車で通学している子もいるし、学校内は禁煙なのにこっそりタバコを吸う生徒も。16歳からビールやワインは飲めるので(ウイスキーなど強いお酒は18歳から)、週末友だちと飲み会をして泥酔する子もいるとか。

明の友人は飛び級したので今年7月に17歳で卒業し、秋から大学生です。早く大人になるのはいいのか悪いのか。今思うと明は5歳10ヶ月で小学校に入ったためクラスが一番幼かった。ドイツでは親の裁量と市の教育課の検査で入学を1年早めたり遅らせたりできるのです。

当時は早くからいろいろ学ぶのはいいことだと思っていましたが、振り返るとそんなに急がなくてよかったのかもしれない。早く学校を出ても早く働き始めるだけで、一度働き始めるとずっと働くことになるのだから。けれど本人は1歳から幼稚園に入れられ「4年も通ったからもういい。早く学校に行きたい」と当時言ったのです。もし1年遅らせていたら今の友だちとは出会えなかったわけで、何がよかったのか悪かったのかなんて誰にもわからない。こうして子どもも私も年を重ねていきます。